西田哲学会会報

第四号

題字　上田閑照

発行・西田哲学会事務局
〒九二九―一一二六
石川県かほく市内日角一番地
石川県西田幾多郎記念哲学館内
電話（〇七六）二八三―六六〇〇

会長就任挨拶

大橋良介

今期の会長をつとめさせて頂くことになりました。とうてい任に堪えないことを恐れますが、それゆえに会員の皆様のご支援・ご指導をも、仰ぐ次第です。

西田哲学会は他の学会にくらべて、ふたつの顕著な特徴を有しています。ひとつは「A会員」の存在です。これは、西田哲学に接する人たちの範囲が、アカデミズム世界を越えて広がっていることを、示唆します。ふたつめの特徴は、「国外」の会員が多いことです。これは、西田哲学研究が日本国内だけでなくて、広く国外でも推進されていることを、物語っています。上記いずれの特徴も、西田哲学そのものの特徴に起因すると思います。すなわちひとつは、難解ではあっても人生を考える者の心に直接に響くものを持っていること、そしてふたつには、どこまでも哲学という地盤に立ちながら、しかも西洋哲学と類型を異にした独創性と現代性を持つことです。

「B会員」と「C会員」の多くは、他の学会の会員を兼ねていられると思います。そしてアカデミックな関心を主軸のひとつにしていられると思います。しかしそれだけに、上のような西田哲学の特徴は、哲学そのものの在り方への問いを惹起して、会員諸氏の哲学研究における有力な作用因になっているのではないかとも、忖度します。

ABCそれぞれの会員から、それぞれの活動を通して会に寄与していただくことで、西田哲学会は自動的に発展しゆくと確信しています。ただ会を預かる側としては、発展が順調となるように工夫を重ねていく責務があります。何よりも、会員の多層さから来る多様な関心と活動を包み得る場所を、維持・形成していかなければなりません。そのためには、年次大会のプログラムや会報の内容を工夫することが必要です。特に国外での西田研究の助成は、ひとつの重点にしたいと考えます。

なお、会員のどなたからもアドバイスを受け付けられるシステムはないかと考えています。良い智慧があれば、お教えください。

西田哲学会 第四回年次大会

西田哲学会第四回年次大会が、予定通り平成十八年七月二十二日と二十三日の両日にわたって大谷大学にて開催された。

二十二日は、「プレカンファレンス」（『善の研究』の「意志」の問題をめぐって）、および平行して「哲学サロン」が、例年通り午前中に開かれた。午後には、慶應義塾大学の斎藤慶典教授「空と無　そして絶対――西田哲学をてがかりに」、大谷大学の長谷正當教授「場所的論理と浄土教」、の二講演が行われた。その後大谷大学構内にて、懇親会がもたれた。

翌二十三日には総会をはさんで、つぎの四氏の研究発表と、海外報告も兼ねた一つの研究発表がなされた。竹花洋佑「ヘーゲル判断論と西田哲学」、張政遠「状況的行為としての行為的直観」、守津隆「戸坂潤の西田哲学理解について」、藤城優子「西田哲学における「推論的一般者」の意義について」。林永強「西田幾多郎における「日本」――『日本文化の問題』を中心として」。

つづいて「生命」をテーマとしたシンポジウムが、九州大学の吉田眞一教授、大阪大学の檜垣立哉教授、大阪教育大学の岩田文昭教授の三氏を提題者として、同志社大学の山形頼洋教授の司会によって開かれた。また現在中国に在住のフランス人の研究者、トランブレ・ジャサント氏による特別発表がなされ、研究書の出版計画等も伝えられた。

講演、シンポジウムは、『年報』に掲載される予定であるので、詳しい内容はそちらでごらんいただきたい。

（文責・岡田勝明）

第四回総会報告

第四回年次大会において、総会が開催され、以下のような報告および承認がされた。

本年は理事選挙が行われ、下記のように二十名の新理事が決定された。また新理事による互選によって大阪大学の**大橋良介教授が新会長に選出**された。任期は三年である。（次頁に続く）

（前頁より続く）＜新理事＞上田閑照・大橋良介・氣多雅子・藤田正勝・小坂国継・森哲郎・秋富克哉・岡田勝明・松丸壽雄・浅見洋・板橋勇仁・大峯顯・米山優・水野友晴・大熊玄・田中裕・野家啓一・美濃部仁・坂部恵・田中久文

また二〇〇五年度の会計報告がなされた。学会は学会費によって運営されており、出費の大部分は『年報』および「会報」の印刷と郵送費である。ところが現在単年度の収支決算では赤字になっており、学会費の払込をお忘れの方に、学会費支払いをお願いしたい旨、伝えられた。

第五回年次大会は、平成十九年七月二十一日・二十二日に決定された。場所は総会後の調整により**獨協大学**に決定した。

（文責・岡田勝明）

理事会報告

大会初日に行われた理事会（出席者十九名、委任状提出者五名により、成立）の審議内容、および関連する問題について報告する。

まず、水野理事から、趣意書・規約の英語版作成を委託する業者の選定について、また米山編集委員長から、会報と会誌の発行状況および今後の予定について、説明がなされた。

続いて、選挙管理委員会より理事選挙の結果が報告され、引き続き新会長の選出が行われた。選挙結果は、別に記載されているので、参照されたい。

最後に、来年度の大会日程と場所について、これも別記載の通りであるが、ここでは、今後問題になると思われる開催時期について申し添えたい。実は、来年度の会場候補として東京の大学数校を挙げて大会後直ちに交渉に入ったが、近年多くの大学がセメスター制の導入で前期試験を七月いっぱい（場合によっては八月初めまで）実施するため、その期間の教室・施設使用に大学側が難色を示す傾向が増えている。学期末行事の変化は、大学に職を持つ会員の大会参加にも影響を及ぼす。来年度は、規定に従って、かほく市の西田幾多郎記念哲学館で開催予定のため、すぐに変更の検討を開始する必要はないが、大会日程は、会誌の制作など、他の重要事項と密接に関連するだけに、手続き面でも慎重に検討していかなければならないと思われる。

（文責　秋富克哉）

シンポジウム論点

西田哲学において生命とは何か

同志社大学　山形頼洋

「生の哲学について」で、生命は意識と同一視される。さらに意識の本質は、人格的自己の自覚に求められる。そして「私と汝」が明らかにするように、真の自覚は、自己の底に絶対の他を見、絶対の他において自己を見るという自己否定としてのアガペーにおいて成立する。したがって生命とは、絶対的矛盾の自己同一を意味し、その自己同一によって成り立つ行為的直観と同義語である。ところで、その後の西田哲学の展開は、働く個物である行為的自己を、一般的限定と個物的限定とが即で結ばれる弁証法的一般者の自己限定として規定する。

行為的直観である働く個物において、すなわち人格的生命において、働くことは見ることであり、見ることは働くことである。しかも、働くとは、単なる機械的運動でもなく、また生物の生成、成長のような目的論的な活動でもない。働くとは物を作ること・ポイエシスである。物を外に作って見ることである。作られた物が作るものに対立することである。作られた物が逆に作るものとなることである。人格的生命は自分が作った物を「客観」として見るのである。生命はその本質において、自分が作る物を、世界の絶対的事実として直観するのである。これが行為的直観の意味である。生命がそこから生まれそこに死んでいく環境世界と、生命との関係は、因果的でも、目的論的でもありえない。その特別な関係が表現的関係と言われる関係である。西田哲学にとって、表現的関係が根源的で具体的な関係・平常底であり、他の関係は、派生態として一面的で抽象的な関係に過ぎない。物理学者の操作が世界の、歴史的世界の創造活動を表現しているが故に、彼は自分の行為に世界の絶対的事実を直観するのである（「経験科学」）。私の行為が世界の唯一局面となる。これが「生命」においてホルデーンの説を援用しながら明らかにされる有機体とその環境との相互関係の意味である。

生命の本質である、世界と人格的生命との表現的関係は、「死に至る病」の自己の定義と重ねることができる（「実践哲学序論」）。自己とは自己自身との自己関係であると同時に、その自己関係は、絶対の他者によって措定された関係である。自己関係とは個物の自由な自己限定に他ならないが、その個物的限定は絶対的第三者によって措定されているのである。自由な個物が措定されているということの意味が、個物に身体があるということであり、個物に環境があり社会があるということである。そして、個物と環境世界との関係が表現的であることによって、個物は、環境世界によって因果的に決定されず、また目的論的にも包摂されない、自由な自己関係として（強情な絶望として）、人格的意識であり得るのである。

エッセイ

西田哲学と私

小口崇博

「西田幾多郎」ということばに接したのは、私が小学生の頃だった。父の書斎に西田幾多郎の著書がたくさんあったからである。父は教員で哲学会に所属し、今生きていれば百歳近くである。父は多くを語らなかったが、「物事の本質を純粋に端的につかめ」とよく言っていた。

こんな家風だったので、私は教員になってからも長野県下各地の哲学会に入会した。

信濃哲学会の流れをくむ「無

名会」にも、長年出席させていただき、西田哲学について学ぶことができた。昭和四十年代のある冬、善光寺の宿坊で『善の研究』の読み合わせをしていた時のことである。純粋経験の「色」を見、音を聞く刹那」について参会者からいろいろ具体例が出されて、なるほどそうかと感動したことが鮮明である。

今はこの流れをくんで信濃教育会の生涯学習センターで「哲学の道」講座を開いている。講師は、上田閑照先生に続いて岡田勝明先生である。この講座にもほとんど出席してきた。

大谷大学で開かれた第四回年次大会の総会で、上田閑照先生が「近頃の大学の学科から哲学ということばがなくなってきている。」と言われた。これは大学だけではなく義務教育の現場においても言えることである。

それでも諏訪では哲学の学習が細々と続いている。今年は『西田幾多郎哲学論集Ⅰ　場所、私と汝他六編』を松丸壽雄先生のご指導で読み合わせしている。

松丸先生の前は三十年間上田閑照先生にご指導いただいてきた。「純粋経験、場所、自覚、絶対無など」についてである。最後の年には、上田先生のご自宅にまで押しかけて「十牛図」の「人牛倶忘」についてお聞きしたりした。そのたびに自己のありようを考え襟を正す思いであった。このようないきさつから私ごとき拙い者が、西田哲学会にも入らせていただくことになった。

上智大学での第二回年次大会も、わたしにとってはハイレベルであったが、その中で上田先生が若い哲学者たちに対して率直にご指導されているお姿には心打たれた。私たちの拙い質問にも、いつもていねいに対応してくださってきたことにも感謝でいっぱいである。

今も教育行政にたずさわっていて、西田哲学はやっぱり私の思想の芯になっていると自覚するこの頃である。

深度の次元と場所

ゴーベル・マルクス

『無制約なものへの問い』（„Die Frage nach dem Unbedingten“）というパウル・ティリッヒ（Paul Tillich）の有名な著作の中に「失った次元」（„Die verlorene Dimension“）という論文がある。この論文でティリッヒは近代の西洋人の宗教観を分析した。これを見れば、深度の次元の喪失は現在の西洋人の状況を断定的に規定することがティリッヒの基点であることがわかる。新しい宗教に入る人が増え、社会や報道機関でも宗教的なテーマを取り上げ、一瞥して人々が宗教に対して新しい関心を持っているように見えるが、本当の深淵さは認められないと彼は考えている。

この論文が書かれた時は六〇年代であるが、ティリッヒはその時代において現出する状況が一般的な人間の本質的状態自体であると主張する。すなわち、彼にとって深度の次元に対する問いは、基本的な問いとして、ある個別の宗教またはある個別の文化にかかわらず、普遍的人間的なものであると言う。

だが現代のヨーロッパといえば、しばしば〝宗教性の帰還〟ともいわれているのだ。ティリッヒの見解は本当に正当であろうか。しかも、ティリッヒがおよそ四十年前述べているように、このような宗教観は深い宗教理解ではなく、むしろ失った次元を見せているというのは今でも当てはまるのだろうか。

多くの現今の宗教学者は、西洋のプルーラリズム的な社会、特に中欧（北アメリカも含め）において、宗教の状況を表現するのに、〝宗教の市場〟（例えばクリストフ・アウファート、Christoph Auffahrt）という概念を使っている。しかし、その概念を使うと今のヨーロッパの宗教の状況は世俗的であるという印象を受けるが、実は宗教においてキリスト教の優位性からいよいよ多元的な社会へと変わってきており、以前にはなかった選択の自由を持つことができるようになったのである。

日本の場合と言えば、現在の社会は文化としての宗教、新しい宗教と無宗教の間でふらついているかもしれない。世俗化は日本ではコンザムプション（消費）社会の影響に基づいてヨーロッパよりもっと強いという印象を幾度も受けるが、新しい宗教の膨張は沢山の人が既成の宗教に対して―西洋の場合には制度的なキリスト教に対する態度のように―信仰がなくなってくることを示している。

ティリッヒを信じれば、人間自体は無宗教ではなく、深度の次元のみを見失ったことになる。言い換えれば、ティリッヒが提言したようにより深く見ると、現代のヨーロッパにおける〝宗教の市場〟から日本における無宗教観にまでわたって、この次元の探求を現出させうると、〝現在の人間も昔の人間も、比較すればいっそう良いもいっそう悪いもない〟と言うことができる。彼は、次元というのは〝空間的なメタファー〟であるので、水平的平面に対して垂直の次元を〝人間において〟探さなければならないと書いている。

だが、それでは〝人間において〟のところとはどこなのかと、ティリッヒに尋ねることができるのではないか。〝次元〟を正しく理解すれば、〝次元〟というのは人間的な大きさなのではないか。

しかし、ティリッヒの「失った次元」の探求は「無制約なものへの問い」で規定されている限り、その次元は垂直に制約された人間においてでしか見つけることはできないと考えなければならない。ティリッヒの〝空間的なメタファー〟を考え続ければ、空間と本当に合致させる立体的な〝次元〟として取り上げなければならないのではないか。ティリッヒの場合、彼は水平の平面に反し、深度に〝人間において〟、この垂直な次元を探求しようとしているが、彼はそのために次元の一面を脱している。

〝次元〟は人間においてというより、人間は〝次元〟において（……）という見方が正しいかもしれない。人間は〝次元〟において（……）こそ、人間においてもその〝次元〟を見つけることができるといえる。然り、その時ティリッヒの宗教的な〝次元〟の探求は〝場所〟の探求にならなければならない。

国際ホワイトヘッド学会の報告

第六回国際ホワイトヘッド学会が、二〇〇六年七月三日から六日まで、オーストリアのザルツブルク大学で開催された。参加者は三百人以上で、昼間の九部会での研究発表の他、朝夕は基調講演、夜は、一日目は今年が丁度モーツァルトの生誕二百五十周年の記念の年のためコンサートが、二日目は晩餐会が、三、四日目は、希望者のみ参加での本学会の将来のための集会が、開催された。

本大会での日本からの発表者は二十名以上で、Business, Ethics, Existentialism, Nishida, の他、Physics, Philosophy of Religion, Theology and Science 等のセクションで参加。最後の日の午前の西田セクションの責任者は延原時行教授で、発表者は日本人の五人。司会者は前半が延原教授で、後半は花岡であった。このセッションでの討論は、日本、スイス、オランダ、中国等の参加者によって活発になされた。日本ホワイトヘッド・プロセス学会からは、晩餐会でIPN（International Process Network）に村田晴夫会長によって寄付金が贈呈された。今後の国際ホワイトヘッド学会は、二〇〇八年にインドで二〇一〇年に日本（青森）で開催されることになった。

（大阪府立大学名誉教授・花岡永子記）

西田哲学研究会のご案内

・西田哲学研究会［於東京］

毎月一回、読書会を開催しています。原則として第三週目の土曜日の午後三時から六時までですが、都合で日程が変更になることがありますので、関心のある方は左記の事務局までご連絡ください。次回の開催日時、開催場所、テキストをお知らせいたします。

なお、十月は七日（土）に開催の予定です（テキストは「絶対矛盾的自己同一」）。

また、当研究会では毎年、機関誌『場所』を発行しています。

〒一六七―〇〇五一
東京都杉並区荻窪
四―二五―一一―七〇一
西田哲学研究会事務局
nishidaphi@mx9.ttcn.ne.jp

・西田哲学研究会［於京都］

故西谷啓治先生のご指導のもとに始まった当研究会は、すでに四十年を超えて続いています。西田幾多郎全集を第一巻から読みついで、次回は十二月十日（日）に、京大会館で行われ、十一巻所収の「哲学論文集第七　一　生命」を取り上げます。年に四回開催されます。

連絡先　築山修道
電話
（〇七四八）八六―七五〇九

第五回 年次大会発表者公募

総会報告の記事においても述べられているように、平成十九年七月二十一日・二十二日に、年次大会が予定されている。発表をご希望の方は、八百字程度の発表内容概要、簡単な略歴、もし研究業績等がおありであれば業績書をそえて、平成十九年三月末までに、西田哲学会事務局にお送りください。審査を経て、発表者が決定されます。

『西田哲学会年報』掲載論文の公募について

当学会の機関誌『西田哲学会年報』に掲載する論文を募集しております。論文を投稿しようとする会員は、次の要領で応募してください。内容的には西田との関係に言及があれば、京都学派の他の哲学者あるいは西洋の哲学者などについての論考でも構いません。

1．応募資格
本会B会員またはC会員であれば誰でも応募できます。

2．応募方法
原稿は四百字詰め原稿用紙に換算して四十枚以内（文献・注を含む）が原則。四十枚を越える場合は、五十枚を限度として、その超過分の実費をいただきます。原稿五部と二百語程度の欧文要旨（英・独・仏のいずれか）五部を提出して下さい。原稿にも、氏名、ふりがな、可能ならば所属機関を明記して下さい。

提出原稿は、可能な限りフロッピーディスクか電子メールで入稿することが望ましい。また、原稿ファイルは、ワープロ用のファイルとテキストファイルの二種類で提出して下さい。ファイルと同時に、使用OSとソフト名を必ず知らせて下さい。

郵送の場合は、封筒の表に「公募論文原稿在中」と明記して下さい。

応募した原稿およびフロッピーディスクは返却しません。

なお将来的にCD―ROMへの収録、Webサイトへのアップを御承認下さい。

3．応募締切
随時応募できますが、平成十九年七月発行予定の第四号への掲載のためには平成十九年一月末までに提出して下さい。その時点で、一つの区切りをつけて、査読などの編集作業に入ります。それ以降に提出されたものは、次年度の年報のための応募として処理される場合があります。

4．審査
編集委員会の責任において審査・選考します。審査の過程で問題点を応募者に指摘し、書き直しの要求をする場合があります。

5．投稿の際には、下記の事項を明記した紙を添付して下さい。
1）氏名（欧文氏名も）
2）所属（〇〇大学文学部教授、〇〇大学大学院文学研究科大学院生などのように、詳細に記して下さい）
3）論文名（欧文題名も）
4）連絡先
・郵便物の送付先（自宅住所あるいは勤務先住所）
・電話やFAXによる連絡先（自宅あるいは勤務先）
・電子メールアドレス

6．原稿の送り先および連絡先
〒九二九―一二二六
石川県かほく市内日角一番地
石川県西田幾多郎　記念哲学館内
西田哲学会事務局
TEL（〇七六）二八三―六六〇〇
FAX（〇七六）二八三―六三一〇

編集委員長の三年間を振り返って

米山　優

設立準備委員会のメンバーになったことがきっかけで西田哲学会には最初から関わりを持ったわけですが、初代の編集委員長になるとは想像もしておりませんでした。西田哲学や京都学派の専門家とは到底言い難い私ですし、また人脈も無く、その重責を果たせるものか正直言って不安だったのです。幸いにして編集委員のお二人に助けられ、なんとか曲がりなりにも会報と年報を発行できたことは、感謝の念に堪えません。

会報に関しては、いわゆる研究者ではない方々の文章も載ることにより、西田哲学会の性質が少しは表れたものになっていると思います。また、必要な記事についてのアンケートも行い、充実に心掛けましたが、アンケートはたまに実施した方が良いと思います。

年報で重要な位置を占める投稿論文については、更なる投稿数の増加を期待すると同時に、質的向上のための査読システムの確立が急務かと思います。

これからは、大会の際に、写真を撮り歩くでもなく、記事のために必死でメモを取るわけでもない参加形態を楽しみたいと思います。ありがとうございました。

編集後記

今年は選挙による初めての理事選出が行われ、年次大会初日に行われた理事会にて、新会長が決定された。また『年報』や「会誌」の編集作業に大会当日よりとりかかる必要があったため、前任者編集委員のうちから一名を継続とするということで、私がその任に当たることとなった。さらに上智大学の田中裕教授、京都産業大学の森哲郎教授の二名が編集委員となる合意が得られた。創立からの三年間はなんとか創立熱意の余勢を駆って前に進めるが、この第二期の三年間に哲学会活動の真価を問われることになる。着火がなされたあとどこまで飛べるかは、つぎの打ち上げロケットの性能次第である。責任の重さを痛感するなかで、皆様のご協力なくしてはとても両誌の発刊はおぼつかないといまさらながら強く思わざるをえない。これからも会員各位のご協力をお願いする次第である。

なおエッセーの原稿をいただいた小口さんは長野県下諏訪町教育委員会委員長、マルクスさんは京都大学のドイツ人留学生である。年一回のみの発行、しかも限られた紙面ながら、内容充実を目指したい。ご助言、ご提案、大歓迎である。

岡田勝明

西田哲学会のサイト・アドレス
http://www.nishida-philosophy.org
事務局のメールアドレス
info@nishida-philosophy.org
編集委員岡田のメールアドレス
okada@himeji-du.ac.jp